

Ⅲ まとめ

これまで、インターネットを中心にして、メディアと非行の関係を考察してきた。そこで、分かったことは、まず、高校生の日常生活においては、インターネットは、マスメディアが騒ぐほどには、大きな比重を占めていないということである。むしろ、高校生にとっては、テレビや携帯電話との関わりが圧倒的に重要なのである。もっとも、茨城と東京のデータを比較すると、インターネットの浸透度は、東京の方が高いといえるので、今後、都市化の進展とともに、インターネットの影響力が増大することは予想できる。

その場合、どのような影響が考えられるかという点については、テレビと携帯電話の箇所でも考察したことから、ある程度推論できるかもしれない。すなわち、インターネットには、将来、テレビや携帯電話の代替物としての機能が認められると考えられるのである。例えば、テレビの暴力シーンの影響は、インターネット上の暴力コンテンツの影響と類似性を持ち、また、携帯電話によるコミュニケーションの影響は、インターネットによるコミュニケーションの影響と関連性があると思われる。

このような前提から、インターネットと非行の関係を推論してみると、次のようにいえそうである。まず、高校生にとって、友人と親の存在は依然として重要な存在であり、これを抜きにインターネットと非行の関係を論じることはできない。すなわち、インターネットの利用がそのまま非行に結びつく、といった素朴な議論は支持できないといえる。

おそらく、最もあり得そうな因果の流れは、次のようなものである。まず、高校生と親との関係が、高校生と友人との関係に影響と及ぼすとともに、インターネットの利用形態にも影響を及ぼす。次に、インターネットが影響を及ぼすとしても、高校生が持つ親や友人との関係次第で、正の方向にも負の方向にも現出する。したがって、親との関係が良好（例えば、コミュニケーションがよくとれている、適度に親から注意を受けている）であれば、友人とも健全（例えば、非行に走りそうな友人がいれば注意し、困っている友人がいれば援助する）な関係を構築でき、インターネットの有害情報に接しても、その悪影響を遮断し、非行には走らない。しかし、親との関係に問題（例えば、コミュニケーションが不足している、親の言動を負担に思っている、親が過度に放任している）があれば、友人とも不健全（例えば、非行に走りそうな友人がいても無視し、困っている友人がいても放置する）な関係しか構築できず、インターネットの有害情報に接すると、その悪影響を遮断することができず、非行に走る。

このように考えることができるのであれば、インターネットと非行の問題を検討

、

する際には、インターネット自体の有害性を考察するだけでなく、その有害性を少年自らが希釈することができるように少年を育てる方策（それは、親に最も期待すべきものがあるが、期待できない親の場合には、その代替者をあてがうなど）についても構想する必要があるといえよう。